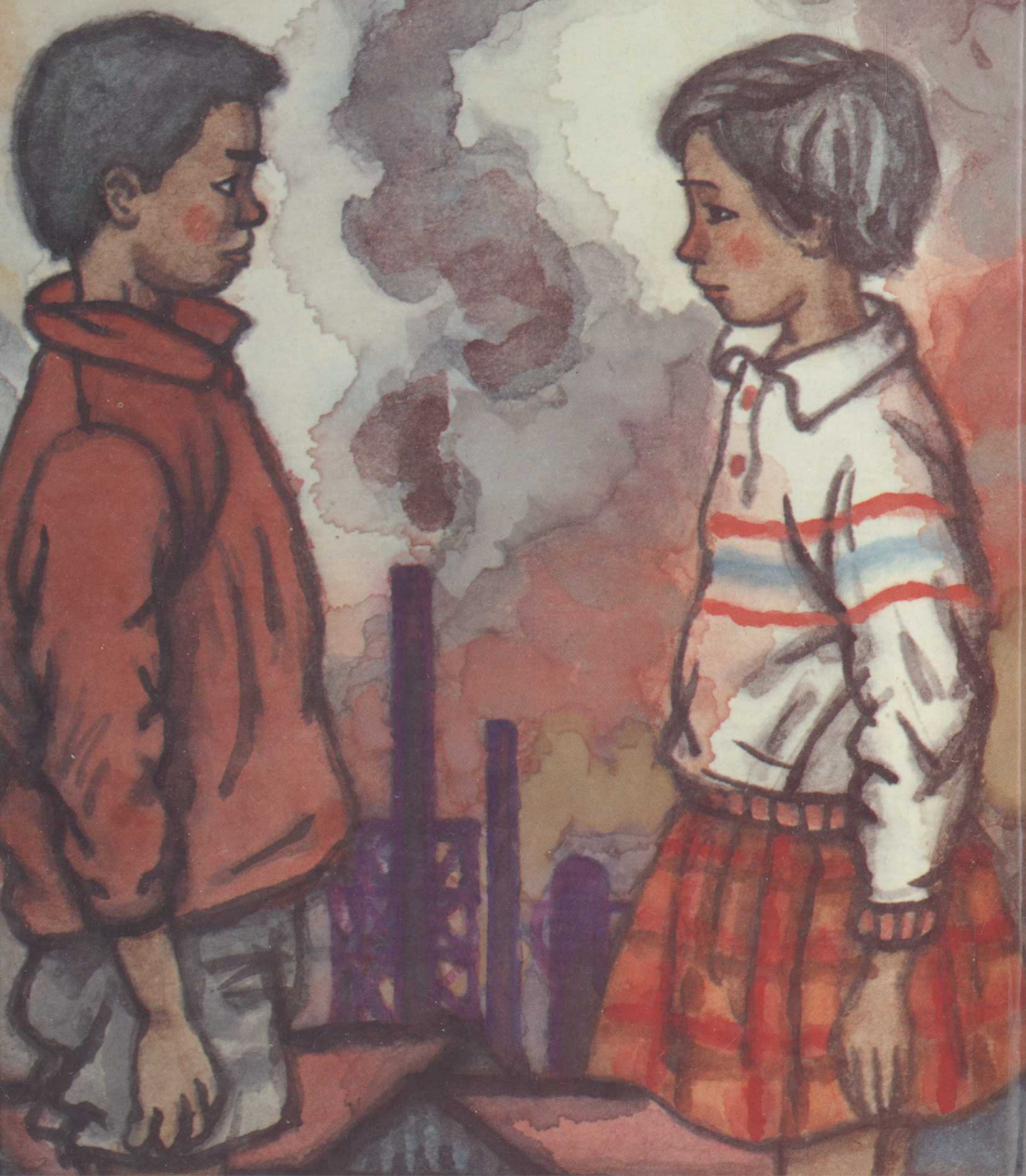


水のない海

野村昇司著 久米宏一絵





水のない海

野村昇司著 | 佐藤宏一 絵

あすなろ創作シリーズ

7

水のない海



著 者／野村昇司

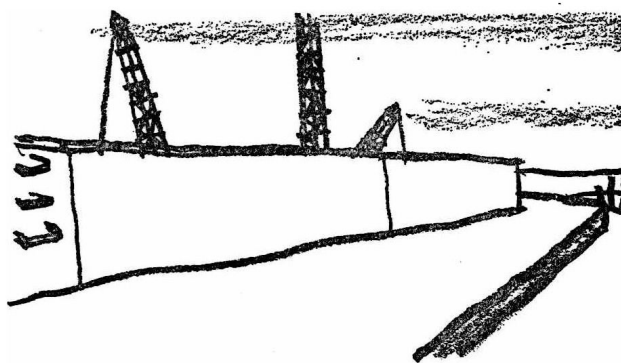
発行者／山浦常克

発行所／株式会社 あすなろ書房

東京都新宿区弁天町107 石嶋ビル 162

電話 (203) 3350／振替 東京9-63084

8393-61807-0060



まえがき

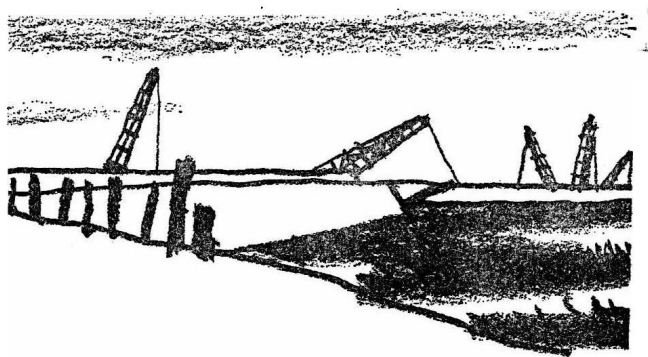
ジェット機のばく音に追いたてられながら、きょ年のくれ、わたしは、東京の羽田はねだのある小学校をたずねたことがありました。

工場のたてこむ中に、近代的な校舎しやがひとときわ目だち、ガラス・ブロックに西目があたってギラギラと光っていました。

暖だんぼうのはいった、まどのないろう下をあんないされ、養護ようごの先生と屋上おくじやうにさがりました。目と鼻の先に、工場の屋根がせまり、ダイダイ色のけむりがあふれ出ていました。

風にのったけむりが、ひしめく人家の路地ちへすいこまれていくのがはつきりと見えました。

「東風の日、このけむりがうちの学校へ流れこみ、体育はもちろん、休み時間も外ではあそべないんですものね——。」



養護^{ようご}の先生は、暗い表じょうで、けむりのゆくえを見つめていいました。

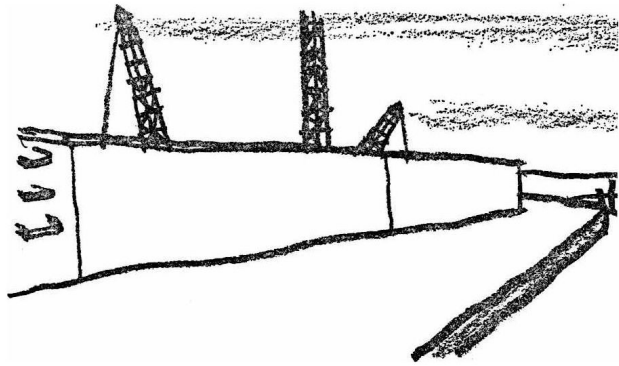
東風がふいてけむりにつつまれても、子どもたちはしかたないといった顔で教室の中にいるのだそうです。きのうまでいっしょにあそんでいた友だちが公害^{こうがい}センソクで入院したと聞いても、さしておどろかないそうです。

「なれてしまったんですねー。」

わたしは、むねをしめつけられる思いで、養護の先生の話聞いていました。

産業の発てんは、工業地帯からの排せつ物で東京の海をまっくろいどぶ池にしていまい、東京の町を、汚染^{おせん}された大気^{たいき}のあなの中へとじこめてしまったのです。このままじっとしていたら、わたしたち人間はどうなってしまうのでしょうか。もちろん、じっとしているわけにはいきません。

なんとか、このあなの中からぬけだすことを考えなければならない



と思うのです。

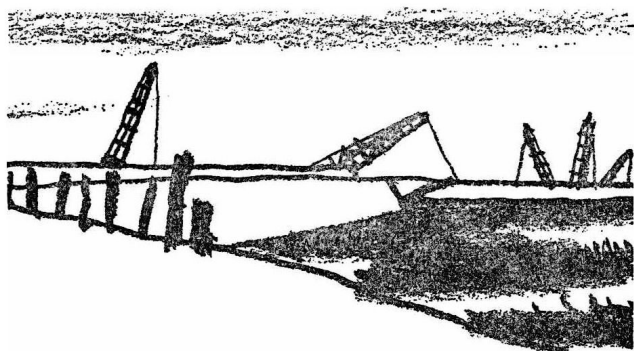
人間が人間として生きていくために、この物語の、一の浦の少年たちのように、ささやかであっても、公害こうがいにたいする認識にんしきをもちながら公害こうがいをじぶん自身の間だいとして受けとめるようにならなければいけないんだと思うのです。

何年かまえ、わたしは、大森の近くの小学校につとめていたことがあります。

ここは、江戸時代から浅草ノリの産地として知られ、ゆたかな漁村ぎょむらだったところでした。

少年のころ、わたしは、よくこの大森の海へ泳ぎにきたものでした。房総ぼうそうの山々がくっきりと見え、海のすきとおる青さが目にしみたことをおぼえています。

その後、教師しになったわたしは、大森の海を見るたびに、海の色が失われていくのをさびしく思ったものでした。



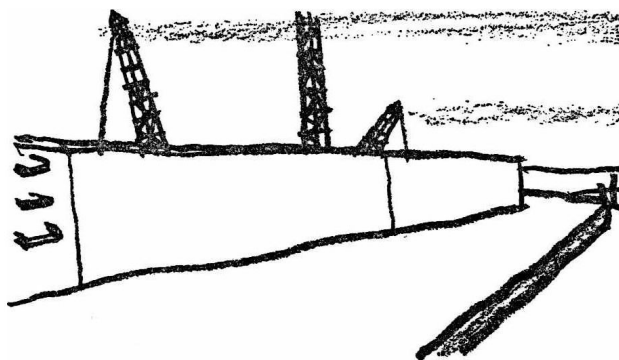
大森の海は、埋め立てられ、二百数十年の歴史をもつノリも、大東京建設のツチ音にかきけされ、りょうしたちは転業をせまられ、大森の町は、いっきよに、りょうしの町から工業の町へと、町の歴史を書きかえてしまいました。

海はどす黒くよごれ、うすよごれた空の下に、水のない海が日に日に広がっていきました。

大森の子どもたちとすごした七年間、子どもたちのつづった一まい文集をいまふたたびひらいてみると、そこに子どもたちの願いやさけびが、ビンビンとひびいてくるのです。

わたしは、その子どもたちの願いやさけびを、ふたたび物語に再現しようと思ったのです。

最後に、いろいろお世話くださったあすなろ書房の山浦常克氏、そしてたのしいさし絵によって物語をさらにおもしろくしてくださった久米宏一先生に深く感じいたします。



また、この物語のためにさまざまな資料^{しりょう}を提供^{ていきょう}してくださったかた
がた、物語について助言^{あつぎ}をしてくださった先生がたに、この紙面をか
りて厚くお礼を申し上げます。

昭和四十六年三月

横浜市鶴見区市場東中町四―三

野村昇司



もくじ

第一章 つりぼり屋

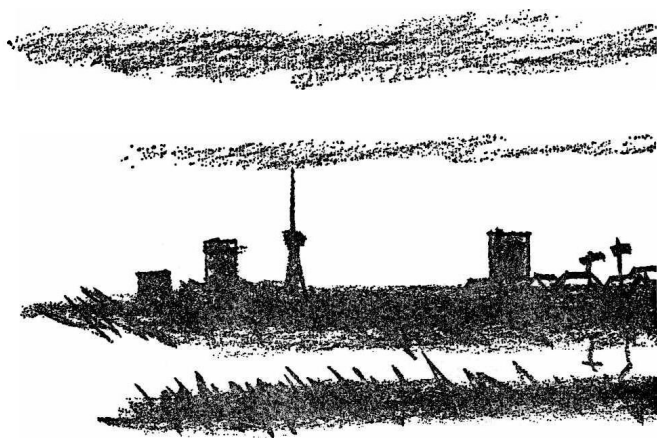
- 1 てい電だぜ……………13
- 2 きょうも、さかなが死んでいた……………21

第二章 転校生

- 1 わたし、飯野京子です……………27
- 2 おれのうちへ何しにきた……………36

第三章 ふるさと

- 1 どちらが、きけんなのかな……………49



第四章

- 2 埋め立て地は“しずかな海”だ……………56
3 ふるさとは海の下に……………67

“しずかな海”へ出発

- 1 全員集合……………78

- 2 運河をわたる、丸太……………82

第五章

資料しりようふんしつ

- 1 資料がきえた……………95

- 2 いってはいけないことなんだ……………99

- 3 先生なんて、わかっちゃいない……………107

第六章

白い眼帯がんたい

- 1 みまいにいったら……………113

- 2 海の上で死にたい……………124



第七章 みどりの一の浦

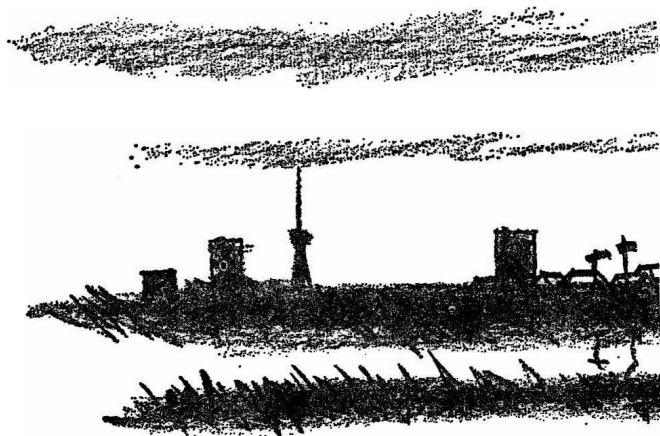
- 3 なれることのおそろしさ……………130

第八章 秋のあらし

- 1 ちやくそうはよかったぞ……………143
2 なんでも、過剰かじょうはよくないのよ……………148

第九章 シアン流出

- 1 ほりのさかながういている……………184
2 シアンが流れこんだんだ……………192
3 ふろ屋へにげたけど……………171
4 どちらが、りょうりされるんだ……………175
1 宇宙基地うちゅうきちがこわされる？……………153
2 基地をめざしてとっ進だ！……………158

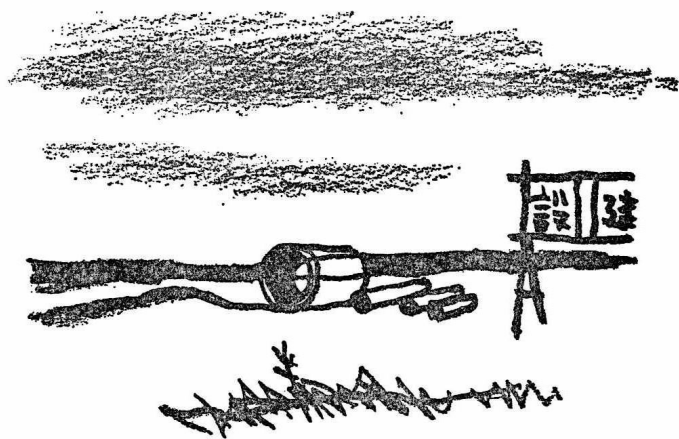


第十章 新しい歴史

- | | | |
|---|---------------------------------------|-----|
| 3 | 一の浦は公害 <small>こうがい</small> のあなの中…………… | 197 |
| 1 | 坂本は、なぜ出てこない…………… | 208 |
| 2 | おなじあなの中の友だちじゃないか…………… | 216 |
| 3 | あしたは町民大会だ…………… | 231 |
| 4 | おまえは、おれたちのくるしみを知って
いるか…………… | 236 |

そうてい・さし絵 久米宏一

水のない海



第一章 つりぼり屋

1 てい電だぜ

「こりや、ひと雨きそうだな。」

いけすのポンプ調節ちようせつをしていたとうちゃんが、急に暗くなった空を見あげていった。すると、まもなく、いなづまのやつが浦船神社うらふねじんじやの森の上でピカッと光ってつっぱしった。かみなりがとどろき、それをかきけすように、大つぶの雨がおいうちをかけてきた。雨のしぶきが、つりぼりの水面を西から東へと走った。

「哲也てつや、お客さんに屋根をくぼってやれ。」

とうちゃんにいわれるまでもない。おれは、かん板ばんを二つ重ねあわせたような雨よけあまの屋根をつり客のからだの上にかぶせるため、ほりのまわりをかけめぐった。

雨つぶはトタン板の屋根にぶつかり、くだけておもしろい音をたてた。

ほりの水面にとびちるしぶきで、ウキがおどっている。それでもつり客は、身動きもせず、じつと、ぶつぶつの水面をにらみつけている。

「哲也、ほりの手つだいもいいけど、じぶんの勉強はすんだのかい。」

ほりに面した台所で夕食のしたくをしていたかあちゃんが、出まどをあけてどなった。

おれは、土間にとびこみ、おくのへやに通じる目かくしのカーテンで、ぬれた頭をごしごしふいた。カレー粉をやくにおいが、ツーンとはなをつく。妹の安子は、電気もつけずに、茶の間のすみっこで人形ごっこをしている。じいちゃんは、きょうもない。また、漁業権を放棄するかどうかのよりあいにでかけているのだろう。

二かいにあがって、つくえに向かうと、おれはしゆくだいがあつたことを思い出した。タニセン、おれの学級たんになの谷先生だけど、近ごろやたらとしゆくだいをだす。見てもくれないくせに、わすれていくと、あのごっつい手をにぎりしめ、ぐりぐりと頭をおさえつける。おれたちは、これを「ウメボシ」とよんでいる。いたいのなんの、この「ウメボシ」をもらうと、一時間じゅう、頭がジーンとして勉強なんて身にはいるものじゃない。タニセンはそんなことをちっとも知らない。「ウメボシ」をすれば、こうかがあがると思っているんだからなさけなくなるよ、まったく。